2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
人間健康学部 人間健康学科	教授	尚 爾華
最終学歴	学　位	専門分野
札幌医科大学大学院医学研究科博士課程修了	博士 （医学）	公衆衛生学、予防医学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

広い教養と深い専門知識を身につけ、少子高齢社会において地域の健康と福祉に貢献できる能力を有する人材を育成する。私がクレドとして掲げる「教学相長をモットーに」に則り、教員と学生が教えあい、共に成長していくことを理念とする。

（目標）

乳幼児から高齢者まで人間の健康に関する基本的な知識を十分身につけることを目標とする。

（方針）

理論と実践をバランスよく学び、習得した知識を基盤として、応用可能なスキルへ発展させていくことが教育方針である。

（計画）

教育にあたっては、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいた教職員の心構えを基本として、学生のモチベーションを維持しつつ、効果的な指導を心がける。オンライン授業の工夫や、外部講師（ゲストスピーカー）の招聘、学外で行う多様で実践的な学習活動を取り入れる。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

食と健康、わたしたちの身体、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

健康管理論（人体の構造と機能及び疾病）、栄養学、小児保健論、学校保健、
総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

・オンライン授業において以下の工夫を行った。

前期において、はじめてオンライン授業（Teams）を受講する新 1 年生が戸惑う場面が多数あったため、後期では、事前の設定や個別対応など工夫し、1 回目の授業から明らかにスムーズに受講することができた。その結果として、後期に実施された 4 科目の授業アンケート評価では、すべての科目においてこれまでで一番良い結果(現調査アンケート様式以来)となった。

・外部講師（ゲストスピーカー）による授業を積極的に取り入れた。

講義科目 1 科目、演習科目 3 科目の 4 科目において、それぞれ現場実務者や専門資格保持者（計 4 人）をゲストスピーカーとして招聘し、学生が様々な視点から学ぶ機会を提供することができた。また、3 年演習の学生らが本学地域創造研究所と連携し、第 57 回定例研究部会（外部講師）と人間

健康学部地域防災コース（4 演習）合同演習に参加し、運営を補助した。

・積極的な学外の実践活動を行った。

学外フィールドワークとして、2 年生、3 年生、4 年生のゼミはそれぞれ、市内スポーツ施設（名東区）、市民生涯学習センター（中村区）、寺子屋（中区）へ行き、食と健康、運動と健康に関する知識を生かし、地域の住民や小学生と共に実践学習を行った。

○作成した教科書・教材

教科書としては、学部教員らの共同執筆により出版された『人間健康学』(唯学書房 2023.2 刊行) 第 7 章「健康を支える食と栄養」を執筆した。人間健康学部 2023 年新カリキュラムで開講される履修必須科目「人間健康学」の教科書として使用される。

教材としては、すべての授業において、300 枚前後の授業資料（PDF や動画、スライド）を作成した。また、毎回の授業には 5～10 問からなる課題シートを作成した。

○自己評価

演習活動において、2 年 3 年 4 年の学生がそれぞれ学外フィールドワークを行い、ゲストスピーカー授業を多数導入したことは、授業の内容を多彩にし、学生の満足度を高めたと考える。コロナ禍の影響によって減少していた実践的な学習活動および学生同士が共同作業する機会を多く設けることが出来たのは大きな成果と言える。

演習以外の授業では、昨年と同様、なるべく分かりやすく、復習しやすいように設計し、更に Teams の使用方法について事前の設定や個別対応など工夫を行った。対面授業において特に昨年から取り入れた反転授業は、学生にとって新鮮な学び方で、意欲的に学習に取り組む姿勢が多く見られた。授業アンケート評価から学生が満足できる教育効果が得られたと考える。

また、教員の研究活動（地域創造研究所定例研究部会）を演習所属の学生らに参加させた試みは、教育面と研究面の相乗効果が実感できたので、教育手法として次年度も継続していきたい。

そして、はじめての経験として、1 年間をかけて学部教員らが共同執筆したテキスト『人間健康学』（唯学書房 2023.2 刊行）の原稿作成および全書の編集作業に携わり、学部教員の専門分野を連携させるスキルを得ることができた。今後も教育面において教員間の相互理解と協力を深めていきたい。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

①「認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成」

②「高齢者におけるアートエンゲージメントが Well-being に及ぼす影響についての調査研究」

○目標・計画

（目標）

①国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部研究チームの共同研究者として、2020 年度～2021 年度に実施した調査結果をまとめ、学会発表と論文投稿で広く発信する。

②国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部研究チームの共同研究者として、研究費を獲得し、新たな研究プロジェクトとして地域高齢者に対して、アートエンゲージメントの健康・幸福への効果を検討するためのコホート研究に参画する。

（計画）

①日本老年社会科学会第 64 回大会(2022.7.2～4 東京)で発表する（共同演者)。米国老年学会議（GAS2022）2022 年 11 月　アメリカ・インディアンナポリス）で発表する（共同演者)。学術雑誌 Geriatrics & Gerontology International へ投稿する（共著)。

②愛知県内の公民館（福祉会館）を利用する 50 歳以上の男女の中高齢者 1,000 人程度を対象とするアンケート調査する。2022　年 8 月に委託先にて調査を実施し、その結果を学術論文としてまとめる。

③研究叢書 No35 原稿の執筆、共同執筆者の原稿を取りまとめ、スケジュール通りに刊行する。

〇2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・丸岡利則、伊藤龍仁、大勝志津穂、鈴木恵三、尚爾華、孫頴、呂洋、野口泰司、西尾敦史、渡辺弥生、王亜婷、馬利中、劉衛東、金良泰、上條憲二. 地域創造研究所叢書 No35『少子高齢社会のヒューマンサービス』唯学書房、2022 年 12 月

・尚爾華、丸岡利則、馬利中、李冬冬、劉鳳新、渡辺弥生、鈴木恵三、野口泰司、中山佳美. 地域創造研究所叢書 No34『高齢者の保健・福祉・医療のパイオニア』唯学書房、2020 年 10 月

・尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、渡邉美貴、鈴木貞夫、中山佳美、森満、馬利中、中野匡隆、丸岡利則. 地域創造研究所叢書 No32『高齢社会の健康と福祉のエッセンス』唯学書房、2019 年 11 月

・尚爾華、澤田節子、谷村祐子、肥田幸子、中野匡隆、木野村嘉則. 地域創造研究所叢書 No27『長寿社会を健康に生きる―地域の健康づくりをめざして―　』唯学書房、2017 年 3 月

（学術論文）

・ Taiji Noguchi, Erhua Shang, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Chiyoe Murata, Tami Saito. Establishment of the Japanese version of the dementia stigma assessment scale. Geriatrics & Gerontology International 22(9) 790-796. 2022 年 9 月

・尚爾華、野口泰司、中山佳美. 地域在住女性高齢者における現在歯数 20 本未満の関連要因～名古屋市体操教室参加者における調査～.　口腔衛生学会雑誌第 70 巻第 1 号. 27-33 頁. 2020 年 1 月

・尚爾華、平井一正. 中国の大学生における理想体型・生活習慣および健康状況の自己評価についての調査.　名古屋産業大学論集第 34 巻 17-22 頁. 2019 年 11 月

・ 尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、渡邉美貴、鈴木貞夫. 女性高齢者の年齢階級別にみた健康状況と生活習慣に関する調査. 東海公衆衛生雑誌第 7 巻第 1 号 114-119 頁. 2019 年 7 月

・尚爾華、郭芳、楊叶、顧軍、姜丽英、中山佳美. 上海市小学生におけるシーラント処置状況に関する調査～一次予防の実施状況と児童の口腔衛生環境について～. 東邦学誌第 48 巻第 1 号 59-63 頁. 2019 年 6 月

・尚爾華、徐静、王慧華、徐秀婷、王 亜婷、中山佳美. 上海小学生における未処置歯の有病状況と治療状況に関する調査～二次予防の実施状況と児童の口腔衛生環境について～. 東邦学誌第 48 巻第 1 号 65-70 頁. 2019 年 6 月

・尚爾華、王亜婷、馬利中.「中国上海にある医療機関従事者における出産・子育てに関する意識調査～「二人っ子政策」開始 2 年間の現状をふまえて～」」『東邦学誌』第 47 巻第 1 号 91～98 頁. 2018 年 6 月

・尚爾華.「大学生の食生活実態と食育の課題～朝食の欠食頻度に焦点を当てて～」『東邦学誌』第 46 巻第 2 号 151～153 頁. 2017 年 12 月

・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第 44 巻第 2 号 117～139 頁. 2015 年 12 月

・Masakazu Washio, Kazuyuki Takeida, Yumiko Arai, Erhua Shang, Asae Oura, Mitsuru Mori. Depression among Family Caregivers of the Frail Elderly with Visiting Nursing Services in the Northernmost City of Japan. International Medical Journal Vol.22, No.4, pp.250−253. 2015 年 12 月

（学会発表）

・Taiji Noguchi, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Erhua Shang, Chiyoe Murata, Tami Saito. Interactions with People with Dementia, Learning Experiences, and Public Stigma Against Dementia . The Gerontological Society of America (GSA) 2022 Annual Scientific Meeting. Indianapolis, America. 2022 年 11 月

・野口泰司, 尚爾華, 中川威, 小松亜弥音, 村田千代栄, 斎藤民：認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成. 日本老年社会科学会第 64 回大会. 東京都. 2022 年 7 月

・鈴木恵三、飯田恭子、尚爾華. 介護サービス相談員派遣等事業の経過、東海地区（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）の概況. 第 68 回東海公衆衛生学会学術大会. 2022 年 7 月

・尚爾華, 野口泰司, 北澤一利, 中野匡隆, 肥田幸子, 渡辺弥生, 鈴木恵三, 森満. 介護予防施策としての「通いの場」が参加者の心身に及ぼす影響：アクションリサーチによる事例報告. 第 32 回日本疫学会学術大会. 東京都. 2022 年 1 月

・鈴木惠三、尚爾華、中野匡隆、北澤一利、森満. ふまねっと運動、東海地方の広がり. 第 66 回東海公衆衛生学会. 岐阜県各務原市. 2020 年 7 月

・尚爾華. 中国「二人っ子政策」による少子化対策の効果に関する一考察―上海市医療職女性における出産・子育てに関する意識調査（第 2 回）の結果から. 第 84 回日本健康学会総会. 長崎県長崎市. 2019 年 11 月

・尚爾華、野口泰司、中山佳美、森満、中川弘子、渡邉美貴、依馬加苗、鈴木貞夫. 2018 年中国上海市小学生未処置歯の保有と治療状況～学校健診結果と日本の比較～第 78 回日本公衆衛生学会総会. 高知県高知市. 2019 年 10 月

・依馬加苗、中川弘子、渡邉美貴、細野晃弘、柴田清、近藤文、若林諒三、市川麻理、野口泰司、上島寛之、尚爾華、永谷憲司、鈴木貞夫. 一般住民における職種と主観的ストレスとの関連:J-MICC Study 岡崎. 第 78 回日本公衆衛生学会総会. 高知県高知市. 2019 年 10 月

・尚爾華. 中国北京市大学生における健康状況の自己評価と生活習慣・ストレスとの関連. 日本ヒューマンヘルスケア学会第 3 回学術総会. 愛知県大府市. 2019 年 9 月

・尚爾華、上田裕司. 中国都市部大学生の身長、体重、体格指数および理想体型に関する調査. 第 62 回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. 2019 年 9 月

・Erhua Shang. The integrative analysis of Chinese college students' lifestyles and health. 第 62 回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. 2019 年 9 月

・上田裕司、尚爾華. 薬物乱用防止教育に対する中学校教員の意識と関連要因―質問紙調査の分析結果から―. 第 62 回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. 2019 年 9 月

・尚爾華、野口泰司、中山佳美、 森満、中川弘子、西山毅、渡邉美貴、小嶋雅代、今枝奈保美、神谷真有美、依馬加苗、加藤利枝子、 鈴木貞夫. 地域在住女性高齢者における現在歯数の関連要因. 第 65 回東海公衆衛生学会学術総会. 愛知県名古屋市. 2019 年 7 月

・野口泰司、中川弘子、西山毅、渡邉美貴、細野晃弘、柴田清、神谷真有美、尚爾華、市川麻理、若林諒三、上島寛之、永谷憲司、依馬加苗、山田珠樹、鈴木貞夫. 高齢者の就労および働き該が健康感に及ぼす影響:5 年間の縦断研究. 第 65 回東海公衆衛生学会学術総会. 愛知県名古屋市. 2019 年 7 月

・尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、鈴木貞夫,女性高齢者における年齢階級別健康状況・生活習慣および主観的な健康度に関する調査～名古屋市内にある体操教室の女性参加者を対象に～.静岡県浜松市.2018 年 7 月

・上島寛之、小嶋雅代、細野晃弘、荒井健介、辻村尚子、岡京子、 藤田ひとみ、岡本尚子、神谷真有美、近藤文、片桐辰徳、若林諒三、 望月美咲、尚爾華、鈴木貞夫.地域住民における食塩摂取量評価法の比較と活用法の検討. 第 74 回日本公衆衛生学会総会.長崎県長崎市.2015 年 11 月

・望月美咲、小嶋雅代、細野晃弘、荒井健介、辻村尚子、岡京子、 藤田ひとみ、岡本尚子、神谷真有美、近藤文、片桐辰徳、若林諒三、上島寛之、尚爾華、鈴木貞夫. 起床後第 2 尿を用いた地域住民の食塩摂取状況の把握. 第 74 回日本公衆衛生学会総会. 長崎県長崎市.2015 年 11 月

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・2022 年 4 月～2023 年 3 月
全国老人福祉施設協議会令和 4 年度調査研究助成事業（研究協力者）

・2020 年 4 月～2023 年 3 月
愛知東邦大学地域創造研究所少子高齢化社会の健康と福祉の国際比較研究部会共同研究費（研究代表者）

・2020 年 4 月～2021 年 3 月
国立長寿医療研究センター長寿医療研究開発費（研究分担者）

・2018 年 4 月～2020 年 3 月
愛知東邦大学地域創造研究所少子高齢化社会の健康と福祉研究会共同研究費 （研究代表者）

・2016 年 4 月～2018 年 3 月
愛知東邦大学地域創造研究所地域の健康づくり研究会共同研究費 （研究代表者）

○所属学会

日本公衆衛生学会、日本ヒューマンヘルスケア学会、日本学校保健学会、日本疫学会、 東海公衆衛生学会、日本混合研究学会

○自己評価

2020 年から 2 年間かけて行った大規模調査の結果（認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成）を共同研究者として本年度に国際学会において発表し、学術誌に論文（英文 1 本）が掲載されたことが大きな研究成果である。

研究叢書 No35 に関しては、自ら執筆部分を含め、学内外の共同執筆者の原稿を取りまとめ、当初のスケジュール通りに取り組み、2022 年 12 月に刊行できた。叢書 No32(2019 年 11 月)、No34(2020 年 7 月)、そして今回の No35 と 3 冊合わせて、同じく少子高齢社会の健康と福祉という分野としての「グリーンシリーズ」を完成させることができた。地域創造研究所共同研究費の助成を受けて、2016 年から連続して 3 つの研究部会の研究代表者として役割を全うした。

前年度に続き、国際的に活躍している共同研究者との研究打ち合わせを積み重ね、次年度に開催される国際学会および国内学会へに投稿した。国際学会では筆頭演者 1 題、共同演者 1 題が採用され、国内学会においては共同演者 2 題が採用された。その他、国際学術専門雑誌への論文の作成、外部団体研究補助金への応募を行い、研究の成果を広く発信する準備を整えた。

本年度の研究活動においては、コロナ禍の影響を最低限に抑え、継続的に実施できたと考えている。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

人間健康学部執行部メンバー、地域創造研究所副所長・運営委員会委員、国際交流センター運営委員会委員、大学再編ワーキンググループのメンバー、人間健康学部各ワーキンググループのメンバー、大学女子バスケットボール部長として貢献する。大学広報の一環として、地域団体、高校への出張講義の要請に応じ担当する。

（計画）

人間健康学部執行部メンバーとして、学部内の業務を遂行する。人間健康学部『人間健康学』テキスト作成ワーキンググループ座長として貢献する。地域創造研究所副所長・運営委員会委員として、研究部会の活性化や叢書 No35 号の刊行に貢献する。大学再編ワーキンググループのメンバー、国際交流センター運営委員会委員、大学女子バスケットボール部長として役割を果たす。大学広報の一環として、外部団体および教育機関への出張講義を担当する。

○学内委員等

地域創造研究所副所長・運営委員会委員、教養教育センター運営委員会委員、国際交流センター交流委員会委員

○自己評価

大学運営業務に精力的に取り組み、人間健康学部、地域創造研究所、学内委員会、各ワーキンググループにおいて役割を果たすために努めた。

人間健康学部執行部メンバーとして、学部内にて担当した業務を遂行し、学部長の指導のもと、学部運営に貢献した。学部内『人間健康学』テキスト作成ワーキンググループの座長として、学部各教員への調整を担当し、予定通りに出版できた。

地域創造研究所副所長・運営委員会委員として、外部講演者を招聘した第 57 回定例研究部会を初のハイフレックス形式の開催として企画運営した。本学会場とオンライン参加する国内外研究者合わせて 100 名以上同時に結び、講演とディスカッションができた。また、2016 年 4 月より 7 年間にわたり、学内外の研究者らと共に行った研究部会活動の集大成として、叢書グリーンシリーズ（No32.No34.No35）を完成させた。その刊行記念として、2023 年 3 月に本学会場参加とビデオメッセージ参加の執筆者 19 名と事務局担当者 2 名が交流できるセミナーを主催した。これらの取り組みによって本学地域創造研究所における研究活動の活性化、発信力の向上に努めた。

大学再編ワーキンググループのメンバーとして、大学および人間健康学部の事業計画に関する議論に参加し、新しい視座を得ることができた。これを今後の大学および学部の運営に活かしていきたいと考える。

国際交流センター運営委員会企画したイベント「MEET THE TEACHERS！」第４弾の登壇者として、自分のこれまでの経験を紹介し、本学学生に海外への興味関心を喚起させ、委員として貢献した。

大学女子バスケットボール部長として監督と協力し、部の運営を行った。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

NPO 団体（ふまねっと）や名古屋国際交流センター（NIC）、中国上海医療研究機構との交流・連携を強化し、専門知識を生かした地域活動や国際交流活動を中心に社会貢献をする。

（計画）

①第 33 回愛知サマーセミナー　講師

②中国上海浦南病院医学セミナー　講師

③「認定 NPO 法人ふまねっと」が主催するスキルアップ講習会・サポーター養成講習会　補助員

④名古屋国際センター（NIC）スキルアップ研修会に参加し、地域の参加者と国際交流活動の継続

⑤東邦高校 PTA 役員研修会　講師

⑥愛知県健康管理士会 2022 年度公開健康セミナー　講師

○学会活動等

所属学会で学会発表し、学術専門誌の査読委員として貢献した。

○地域連携・社会貢献等

年度計画の通り、以下の地域連携・社会貢献を行った。

①第 33 回愛知サマーセミナー講師として健康関連の講座を担当した。

（2022 年 7 月 16 日 会場：東邦高校）

②中国上海浦南病院医学セミナー講師として「日本研究者との共同研究における研究論理審査について」講座を担当した。（2022 年 8 月 30 日　オンライン）

③「認定 NPO 法人ふまねっと」スキルアップ講習会・サポーター養成講習会補助員を務めた。

（2022 年 9 月 1 日 会場：愛知東邦大学　協力：愛東邦大学地域創造研究所）

④名古屋国際センター（NIC）スキルアップ研修会に参加し、「世界を知ろう、多文化共生について」をテーマとして地域の参加者と国際交流活動を継続した。

（2022 年 9 月 10 日 会場：名古屋国際センター）

⑤東邦高校 PTA 役員研修会講師として健康関連の講座を担当した。

（2022 年 12 月 10 日 会場：東邦高校）

⑥愛知県健康管理士会 2022 年度公開健康セミナー講演会講師を担当した。

（2023 年 2 月 26 日 会場:名古屋市民活動推進センター）

○自己評価

本年度は上記の通り、社会貢献活動を積極的に行い、愛知東邦大学の教員として地域との関係性を深めることができたと考える。次年度も地域とのつながりを大切にし、本学の知名度向上に貢献していきたい。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

Ⅵ　総括

教育面では、オンライン授業と対面授業に独自な工夫をし、授業アンケートの結果ではこれまで一番良い評価を得ることができた。よって、概ね満足できる教育効果があったと考えられる。次年

度も継続して授業中に取り入れたい。

研究面では、共同研究者として国際学会での発表、学術専門誌に論文（英文１本）が掲載されたことが大きな研究成果である。また地域創造研究所叢書 No35 の完成によって、責任者として取りまとめた叢書グリーンシリーズの３冊がすべて計画の通りに出版されたことで、研究所副所長・研究部会主査としての役割を遂行できたと考える。

大学運営面では、学部執行部メンバーとして学部の業務を遂行し、学部長の指導の下で学部の運営に貢献した。地域創造研究所においては、副所長として所長に協力し研究所の運営に貢献した。地域連携・社会貢献の面においては、地域住民への健康増進に関する普及活動、国際交流活動を継続し、関連スキルを高めることが出来た。

総括として、多くの実践活動と新たな試みによって、学生らおよび私自身の成長が大きく実感できた１年であった。次年度もその経験を生かして邁進していきたい。

以　上